

## 兵庫県のクワガタムシ(1)

故高橋寿郎氏遺稿集No. 1

兵庫昆虫同好会事務局編

兵庫県のクワガタムシについては筆者がかなり前にまとめて発表したものがある(てんとうむしNo.8:141-152,1982)。その後田中正浩氏が同じく兵庫県のクワガタムシをまとめて発表されている(昆虫と自然Vol.22, No.7:9-14,1987)。それ以後、県全体のクワガタムシを取り扱った報文は見られないと思う(断片的な報文はわりと発表されているが、全般を取り扱って記述されたものは見られないと思う)。一方では、新発見、新分布種とか分布地が現れたりしている。そこでここに一番新しい状況での取りまとめを試みた。

何分にも十分な文献を持っていないので、大きな誤りとか脱落があるかと思われる。御教示、御指導を頂ければ幸いである。本文を記すに当たっては多くの方々の御援助を頂いている。ここに厚く御礼を述べさせて頂く。長文になるので分割発表とする。

Family Lucanidae クワガタムシ科

Subfamily Ceruchinae ツヤハダクワガタ亜科

Tribe Ceruchini ツヤハダクワガタ族

Genus *Ceruches* Mac Leay, 1819

ツヤハダクワガタ属

### 1. *Ceruchus lignarius monticola* Nakane, 1978

ミヤマツヤハダクワガタ

*Ceruchus lignarius* Lewis ツヤハダクワガタは Lewis により1883年3♂によって北海道、日光産で新種記載された(Trans. ent. Soc. London, 1883, p.339)。

原記載には(p.340) "I obtained two examples at Sapporo early in August, 1880, one (dead) under a stone on Niohosan the following year" とある。

\*(Niohosan……女峰山, 日光)

三輪勇四郎博士は1934年に Aesalinae 亜科に属していた本種を新たに Ceruchinae ツヤハダクワガタ亜科を創設しそちらへ移された(*Ceruchinae* 属はヨーロッパ産 *Lucanus tenebrioides* Scopoli, 1772 を geotype として創設されたもの, 1819, Horae Ent. I, p.115.)。

三輪勇四郎博士は日光、札幌、十和田の標本を示

されている。その時分布としては北海道、本州が示された。松村松年博士は日本千虫図解第3巻において初めて図説された(1883)。鈴木元次郎も1923年に通俗昆虫雑誌第1号に本種を解説された。

神谷一男・安立綱光は1933年にカラーで図説したが、「分布は北海道、本州、本州では比較的高地に産するもあまり多からず」としている(原色甲虫図譜, 三省堂・東京)。同じ年に出版された加藤正世博士の図鑑(原色日本昆虫図鑑, 第八輯, 厚生閣・東京)では全く収録されていない。

1936年出版の三輪勇四郎・中條道夫両博士による"日本産鞘翅目分類目録, 鍬形虫科"においては分布に本州、九州があがっており、北海道が入っておらず九州があがっている。この記録が具体的にどのようなものかはわからない。

1937年出版の平山修次郎の原色図譜(原色千種鍬形虫図譜, 三省堂・東京)では、「北海道、本州に産し、北海道には稀ならざるようなれども本州では稀なり」として札幌円山産のみをカラーで図説している。同じく平山修次郎の1940年のカラー図鑑(原色甲虫図譜, 三省堂・東京)は1937年版をそのまま収録したものである。

1937年に発表の加藤正世博士の目録(全日本産鍬形虫科一覧目録, 昆虫界, Vol.5, No.45:765-769, 1937)では、分布を北海道、本州、九州としている。

以上が戦前の主要な目録、図鑑での本種の分布の取扱いである。北海道、本州の記録というのは始めから標本があつてはつきりとしているのであるが、九州の分布というのがどのような記録に基づいているのかわからない。

戦前出版の野村 鎮の図鑑(原色昆虫大図鑑第2巻・甲虫編, 1963, 北隆館・東京)では、分布は北海道、本州で九州が入っていない。

1960年発表の野村 鎮の目録(日本産コガネムシ目録, 桐朋学報 No.10:39-79, 1960)では分布は北海道、本州、四国、九州となっており、九州以外に四国の分布が初めて報告されている。

四国からの記録がこれまたどのような産地で報告されているのか筆者にはわからなかった。矢野俊郎による"四国産既知甲虫類目録 III"(松山昆虫同好会時報 No.16, 1961)を見ると四国からの本種の記録は1960年の野村 鎮の目録によるということであり、こちらも詳しい産地がわからなかった。

その後出版された各種図鑑とか目録などには分布北海道, 本種, 四国, 九州となっている。1978年, 中根猛彦博士は"北海道から四国, 九州山地まで分布するとされているが近畿以西では極めて稀のようで"とされており, 上高地産のものに対して下腿の形状が異なることから subsp. *moticola* Nakane を記載された(北九州の昆虫, Vol.24, No.3, p78, Fig.5, 1978)。

この亜種はミヤマツヤハダクワガタとして中部地方から紀伊半島にかけて分布するとされている。1987年, 藤田 宏は四国, 九州に分布しているものは原名亜種, 中部亜種とは体と大腿が太短く, 内側へ強く曲がり, 内歯は突出するがほぼ真横を向くなどの特徴から新亜種 subsp. *nodai* Fujita を記載した。大分県祖母山が原産地であるが熊本県白取山(Mt. Shiratoriyama), 四国の徳島県剣山, 愛媛県の小田深山(Mt. Odamiyama)等の産地のものがバラタイプに指定されている。同時にミヤマツヤハダクワガタには長野型, 山梨型, 静岡~紀伊半島型と地域変異があるが, 近畿地方, 中国山脈-中国地方の分布については全く触れていない(月刊むし, No.197: 3-7, 1987)。

本種の生態はある程度わかっている。幼虫の記載(ニューエントモロジスト Vol.5, No.4, p.12, pl.1, 1956)や写真, 記述(吉田賢治, 日本産クワガタムシ大図鑑, p.65, 82, 104, 1996)などがある。

ミヤマツヤハダクワガタの兵庫県下の分布であるが, 大上宇一氏がツヤハダクワガタを「播磨産甲虫類」(昆虫世界 Vol.11, No.115:112, 1907)の中に記録している。産地とか採集データがないのが残念である。同定については松村松年博士の"日本千虫図解"によるとあるが, 同書第3巻, pl.45, f.4によって同定がなされたのなら, 本種ではなくチビクワガタ *Figulus binodulus* Waterhouse ではないかと考えられる。また, 田中正浩氏は氷ノ山で幼虫を採集したが, 飼育に失敗したと記しておられる(昆虫と自然 Vol.22, No.7, p.10, 1987)。さらに大阪の大築正弘氏からの私信によると箕面昆虫館に氷ノ山産のツヤハダクワガタが展示してあったとある(きペリはむし Vol.15, No.2: 57-58, 1987)。

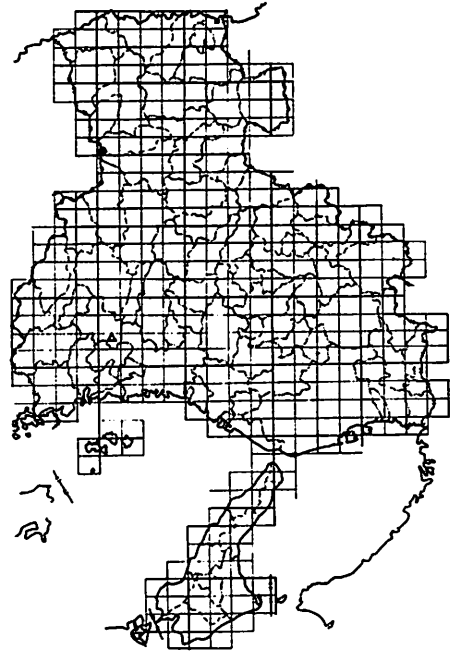
混虫ずかん No.22: 4(1989)の中で, 豊岡高に氷ノ山産らしいツヤハダクワガタの標本があるとの報告があり, これに関連して谷角素彦氏の解説がある(IRATSUME, No.12: 9, 1988)。また, 氷ノ山産らしいツヤハダクワガタが IRATSUME, No.13/14: 78, 1980 で写真をつけて示された。ただ, この写真はあまり良いわけではないのだが大腿の形状からするとミナミツヤハダクワガタ(四国, 九州に分布)のような気がする。はっきりしない標本で氷ノ山産のものかど

うかも疑わしい。どちらにしても氷ノ山にはツヤハダクワガタはいると考えられる。はっきりした記録を是非確認していただきたいものである。

産地。

揖保郡[大上, 1907]?

養父郡氷ノ山[田中, 1987, 高橋, 1987, 谷角, 1990]。



兵庫県におけるミヤマツヤハダクワガタの分布

Subfamily Aesalinae マダラクワガタ亜科

Genus *Aesalus* Fabricius

2. *Aesalus asiaticus* Lewis, 1883

マダラクワガタ

本種は Lewis が♂13♀標本に基づいて図説し新種記載した種である(Trans. ent. Soc. London part.III: 340-341, pl.XIV, fig.5, 1889)。

その採集については, "This little species occurs in large forests of considerable elevation, I obtained it first in May, 1880, above Miyanoshta. I took off bark from a fallen tree which was dead and moss-grown, and then found it in little round holes in had gnawed out in the wood under the bark to winter in.

In June I found it at Chiuzenji, and the following spring on Oyayama, near Kumamoto, always getting

it in the described" と説明している。

1910年の Roon, G. による *W Junk Coleopterorum Catalogus Pars. 8, Lucanidae, p. 57* には分布 Japan として収録されている。

三輪勇四郎博士は1927年, "A List of Japanese Lucanidae, with the description of one new species" (*Ins. Mats., Vol. II, No. 1, p. 29&31*) において分布を本州, 台湾として九州は示されていない。

1930年, 神谷一男は7月中旬に青森県十和田湖畔子の口及び休屋付近にて3♂2♀を採集されたものに基づき, その詳しい形態を図をつけて記述された (*昆虫 Vol. 4, No. 4 : 277-279, 1930*)。

三輪勇四郎博士は"台湾産昆虫目録(鞘翅目)"(台湾總督府中央研究所農業部報告第55号, p. 275, 1931) に疑問符を付けながら分布に Japan proper, Formosa と示されている。

1932年湯浅啓温博士は日本昆虫図鑑の中で図説 (p. 510, f. 993) し, 分布地に本州, 九州, 台湾を示されている。

1933年加藤正世博士は分類原色日本昆虫図鑑第八輯, 鞘翅目(厚生閣・東京) においてはじめてカラーで図説され (pl. 11, f. 2), 分布は本州, 台湾としている。また, 同年昆虫界誌上に白黒写真で図示し, 分布を同じく本州, 台湾としている (Vol. 1, No. 2, pl. 9, f. 5, p. 156-157, 1933)。

1933年, 小坂橋秀治は赤城山を産地に示された (*昆虫世界 No. 436, p. 18.*)。

1934年三輪勇四郎博士は"大日本鍬形虫科の種の研究(5)"を発表になり (*台湾博物学会々報 Vol. 24, No. 134, p. 322, 330, pl. IV, f. 8*), その中で"台湾産甲虫目録"の中で産地台湾は概本ラベルの誤りにつき訂正する」と発表され, 分布は本州, 九州とされている。従って加藤博士の分布台湾は全部間違いとなる。

1936年出版された Miwa, Y. et Chujo, M. "Catalogus Coleopterorum Japonicorum, Lucanidae" (p. 11) において分布は本州, 九州になっている。

1938年関 公一は"北海道より新たに記録されるマダラクハガタとその産地"を発表 (*昆虫界 Vol. VI, No. 52, pp. 538-542*), 新たに本種が北海道に分布していることを報じた。

1939年西島 浩は札幌近郊で得た本種を飼育してその生活史を"マダラクハガタの生活史"として発表した (*日本の甲虫, Vol. III, No. 1, pp. 11-16, pl. 11*)。

1940年平山修次郎は"本館所蔵日本産鍬形虫科の解説(III)"を発表し, 札幌円山産1♂を図示されている。分布は本州, 九州のみになっている (*虫の世界, Vol. 3, No. 11/12 : 175-176, pl. 18, f. 2*)。

1950年宮武睦夫・小林 尚は"石鎚山系の甲虫類

(第一報)"を発表 (*宝塚昆虫館報 No. 73 : 3-4*), その中で皿ヶ嶺から四国新記録として本種の1♀を発表になった。

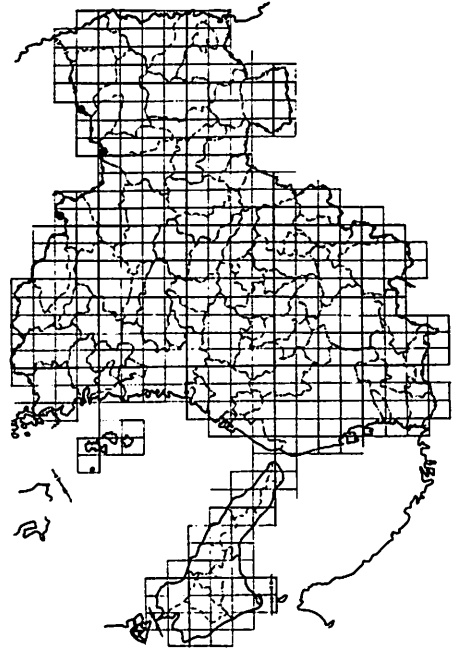
1960年, 野村 領は原色昆虫大図鑑第2巻(甲虫編)にてカラーで図説された (p. 110, pl. 55, f. 7)。そこでは北海道, 本州, 四国, 九州を分布地とされている。

1985年黒沢良彦博士は原色日本甲虫図鑑(II) (保育社・大阪)にて, カラーで図説された (pl. 59, f. 10, p. 334)。分布は北海道, 本州, 四国, 九州, 伊豆諸島(御蔵島), 対馬, 屋久島とある。

1988年岡島秀治・山口 進により"検索入門クワガタムシ"が出版(保育社・大阪)された。その中でマダラクワガタが図説されている (p. 17, 35-36, 50)。分布は北海道, 本州, 四国, 九州, 対馬, 伊豆諸島(利島・御蔵島)となっており, 屋久島には亜種 *sawaii* Fujita et Ichikawa (ヤクシママダラクワガタ) を産すると示されている (*Gekkan Mushi: No. 166 : 38, 1984*)。

1994年, 水沼哲郎・永井信二は"世界のクワガタムシ大図鑑"(むし社・東京)を発表, カラー図説をしている。分布は日本: 北海道, 本州, 四国, 九州, 天草諸島, 対馬, 佐渡島, 伊豆諸島(利島, 御蔵島)となっている。

1995年吉田賢治は"カラー図鑑クワガタムシ・カブトムシ"(成美堂出版・東京)を出版, カラーで図説 (p. 30, 73, 93)。分布は北海道, 本州, 四国, 九州, 佐渡島,



兵庫県におけるマダラクワガタの分布

対馬, 伊豆諸島(利島, 御蔵島)となっている。

1996年吉田賢治は"日本産クワガタムシ大図鑑"(虫研・埼玉)を出版, カラーによる図説をした(p.61, 65,84,107)。分布は北海道, 本州, 四国, 九州, 佐渡, 伊豆諸島(利島, 御蔵島), 天草諸島(下島), 対馬とし, 亜種ヤクシマダラクワガタ(屋久島)も図説した。

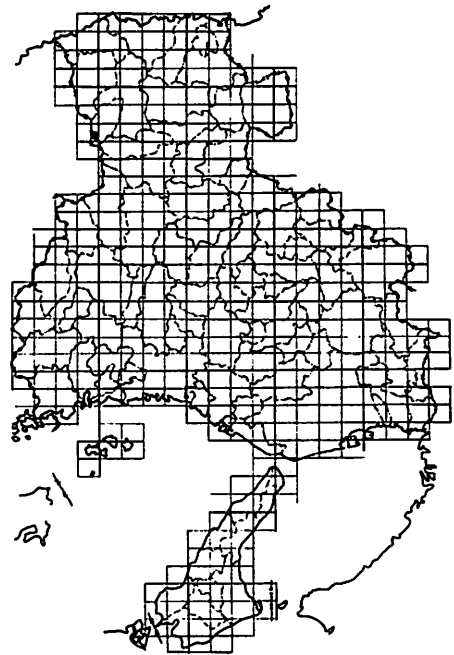
兵庫県における本種の記録は1960年に奥谷禎一博士による氷の山が一番古い(兵庫の自然, のじぎく文庫,p.135)。その後属の山でも記録があり, 宍粟郡の千種町でも記録がある。しかし, わりと産地は偏っているようである。さらに詳しく調べればまだ産地はあるのではないかと考えている。

産地。

宍粟郡千種町駒ノ尾山[佐藤,永幡,1994]。

養父郡氷の山[奥谷,1960, 高橋,1981,1982, 田中, 1987]。

美方郡属の山[辻,1963, 辻,岸田,1972, 高橋,1981,但馬むしの会,1984, 谷角,1985,1986,1988, 高橋, 1982, 田中,1972, 岡島,山口,1988]。



兵庫県におけるマグソクワガタの分布

Subfamily Nicaginae マグソクワガタ亜科

Genus *Nicagus* Leconte

3. *Nicagus japonicus* Nagel,1928

マグソクワガタ

本種は1890年6月4日, Fritze が北海道 Ichikishiri で採集した1(♀?)によって記載された種である(Ert. Mitteil. XVII, Nr.4,p.260,1928)。

三輪勇四郎博士は1934年"大日本鍬形虫科の種の研究(5)"(台湾博物学会々報Vol.24,No.134,p.322,pl.IV, f.7)の中で分布地北海道として図示された。

1936年の三輪勇四郎・中條道夫著"日本産鞘翅目分類目録Part.2, 鍬形虫科(台湾昆虫研究所・台北)"には, クワガタムシ科の種として含まれている。

1937年の昆虫趣味の会調査(加藤正世著)"全日本産鍬形虫科一覧目録"(昆虫界Vol.5,No.45,p.765-769)にもクワガタムシ科に含まれている。

戦前の図鑑類に本種が図示されたものは知らないし, 上記目録以外に本種に関しての文献は見ることができなかった。

戦後, 1955年, 中根猛彦博士は原色日本昆虫図鑑・甲虫篇, 増補改訂版(保育社・大阪)の中でカラーで図説すると同時に体制上コブスジコガネ科に近い感じを受けると述べられた。そして"きわめて稀で現在までに数頭得られているにすぎない"と記されている。

1960年の野村 領氏の"日本産コガネムシ類目録(Toho Gakuho,No.10,p.45)"においては, 本種はコブスジコガネ科に属する種とされた。

1963年, 中根猛彦博士の原色昆虫大図鑑第2巻(甲虫篇)(北隆館・東京)では, カラーによる図説をされるとともにコブスジコガネ科に属するものとして示された(pl.50,f.12,p.114)。分布は北海道, 本州(東北部)とされている。

1975年, 林 長閑博士は学研中高生図鑑, 昆虫II, 甲虫(学研・東京)の中でカラーで図説されるとともに, コブスジコガネ科の種として収録されている(p.67, 386)。

1985年益本仁雄は原色日本甲虫図鑑(II)(保育社・大阪)においてコブスジコガネ科の種として扱っている(pl.63,f.16,p.347)。

ただし, 本種をコブスジコガネ科の種に扱うことに疑問視する意見が次のようにあった。

塚本珪一"日本産 TROGIDAE-コブスジコガネ科-について(京都府私学研究論集,第24号,p.27,1986)". 三宅義一"日本産こぶすじこがね科昆虫の研究の現状とその問題点(北九州の昆虫Vol.33,No.3,p.140, 1986)".

1988年石田正明・藤岡昌介氏はその著"日本産コガネムシ主科目録(LAMELLICORNIA 1st.ed. Supp-

lement)"の中でマグソクワガタ科 *Nicagidae* として独立の科に所属された。

1992年、田花雅一・奥田則雄氏は"マグソクワガタについて(月刊むしNo.256,p.3-10)"の中で奈良県吉野郡川上村北股川畔における本種の多発地点の発見とその生活史、生態、形態、とくに幼虫の形態など詳しく発表されてその幼虫の形態から本種はクワガタムシ科マダラクワガタ亜科に含めるべきであるといった貴重な意見が述べられている。

1994年の水沼哲郎・永井信二による"世界のクワガタムシ大図鑑(むし社・東京)"では、そのトップにカラーで図説、クワガタムシ科のものとして取り扱っておられる。

筆者はクワガタムシ科マグソクワガタ亜科に所属せしめるのがよいと考えている。

兵庫県での記録は足立義弘氏による美方郡秋岡での1♂(28.IV.1971)、矢田川上流砂防ダムで砂礫の堆積した岸の5cmぐらいの石礫の上で採集というのがある(月刊むしNo.250,p.4,1991)(この記録はその他に混虫ずかんNo.29,p.2,1991, IRATSUME No.17,p.71-72,1993に同じものの採集状況の説明がある)。

産地。  
美方郡美方町小代溪谷(秋岡)[山本,1991,足立,1991,1993]。

#### Subfamily Figulinae チビクワガタ亜科

#### Genus *Figulus* Macleay,1819

#### 4. *Figulus binodulus* Waterhouse,1873

#### チビクワガタ

G.Lewis の採集品により C.O.Waterhouse が *Figulus binodulus* として記載した種である。

産地は S.Japan とあるだけで具体的にどこで採集されたものかわからない(Ent. Monthl. Mag.,IX,p.277-278,1873)。

Lewis,G. は1888年"On the Lucanidae of Japan"(Trans. ent. Soc. Lond.,1883 : 339)において"I took twenty specimens of *F.binodulosus*, C.Waterh., at Konose in May, 1881, from and old log in the forest: all the specimens are alike and agree well with Waterhouse's type and description"と述べている(Konose, 神瀬, 球磨川流域~熊本)。

三輪勇四郎博士は1934年"大日本鍬形虫科の種の研究(5)(台湾博物学会々報Vol.24,No.133,p.320,pl.IV, f.3)"において図説されている。そして産地として奈良,台湾; 嘯里,台北を示し,分布:本州,九州,台湾

としている。

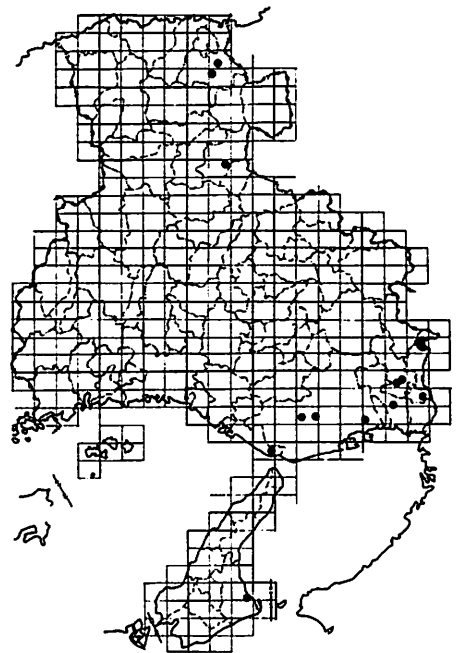
1933年加藤正世博士は"分類原色日本昆虫図鑑第八輯,鞘翅目(厚生閣・東京)"においてカラー図説をした(pl.11,f.1)。

1937年に平山修次郎が"原色千種續昆虫図譜(三省堂・東京)"に図示したマメクワガタ(pl.61,f.13,p.129)はチビクワガタの間違いである。同氏著1940年出版の原色甲虫図譜に全く同じ図版で、産地のみが違って(記載も勿論違って)「チビクワガタ」で図説されている(pl.17,f.13,p.39,産地,高知県土佐産)。

1939年,平山修次郎は鹿児島市外産をを図説した"本館所蔵日本産鍬形虫科の解説(II)(虫の世界Vol.3, No.9/10,p.142,pl.16,f.2)".分布は本州,四国,九州,台湾とされている。

戦後になると大方の図鑑に図説されており,よく知られるようになった。そしてその分布是水沼哲郎・永井信二共著の"世界のクワガタムシ大図鑑"(むし社・東京,1994,p.299)によると,日本,本州,四国,九州,伊豆諸島(御蔵島,八丈島),朝鮮半島,中国,台湾,ベトナム北部になる。種名は"2つの隆起を持つ"の意で,前頭に2つの隆起がある。

兵庫県の記録は1955年,中根猛彦博士による宝塚産によるカラー図説のものが一番古いと思われる(原色日本昆虫図鑑,甲虫編,保育社・大阪,pl.28,f.596,p.87)。朽木採集で数百頭も採れたことがあると



兵庫県におけるチビクワガタの分布

されたが、これは阪急電車沿線御影駅構内にあった桜の朽木から採集されたものであったようにお聞きした記憶がある。県下には全般的に広く分布しているように思われる。

産地。

- 洲本市三熊山[久松,1973, 登日,1974].
- 川西市山下[岡田,1974], 笹部[岡田,1974, 弘世, 1978, 仲田,1978,1982], 見野,大和[1978,1982].
- 伊丹市猪名野神社[河上,1994], 伊丹市[楠井, 1990].
- 宝塚市[中根,1955], 武庫川町[新家,1988], 武庫川町宍布が丘[田中,1992].
- 西宮市六軒町[関,1934].
- 神戸市御影町[芳賀,1975], 藍那(3exs.,14.VI.1978), 押部谷町木見(1ex.,23.VI.1980).
- 明石市明石公園(1ex.,15.VI.1975,etc.).
- 朝来郡和田山町[上田,1987], 牧田岡[谷角,1988,上田,1990].
- 豊岡市内[高橋,1975], 妙楽寺,山本,神武山[上田, 1990].

5. *Figulus punctatus* Waterhouse,1873

マメクワガタ

C.O.Waterhouse により G.Lewis の採集品で *Figulus punctatus* として新種記載されたもので、産地は S.Japan とのみで具体的な産地は示されていない(Ent. Monthl. Mag.,IX,p.278,1878).

G.Lewis は "I obtained only one specimen from an old Celtis (榎) at Nagasaki in February, and I believe it is a good species. There five specimens in my original collection" と記録している(Trans. ent. Soc. Lond.,p.339,1883).

1933年、加藤正世博士は "分類原色日本昆虫図鑑第八巻、鞘翅目(厚生閣・東京)" においてカラーで図説された(pl.11,f.2).

1934年、三輪勇四郎博士は "大日本鍬形虫科の種の研究(5)" (台湾博物学会々報Vol.24,No.134,p.130,pl.IV, f.4) において図説された。分布は九州、台湾とされている。

1936年の三輪勇四郎・中條道夫両博士の "日本産鞘翅目分類目録、鍬形虫科" にはもちろん分布、九州、台湾として収録されている(p.10).

1937年平山修次郎は原色千種積昆虫図譜の中で、マメクワガタを高知県土佐産でカラーで図説した(pl.61,f.13,p.129). 1940年出版の原色甲虫図譜で全く同じ図版を用いてチビクワガタとしてカラーで図説されている(pl.17,f.13,p.39). 写真が小さいのでよくわからないが、チビクワガタと考えるのがよいので

はないかと思う。両者の区別は当時ではかなり困難であったと考えられる。

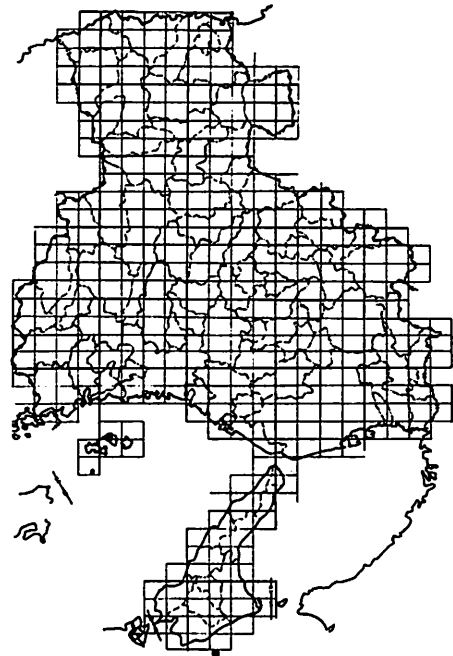
1939年、同じく平山修次郎は "本館所蔵日本産鍬形虫科の解説(II)" (虫の世界,Vol.3,No.9/10,p.142,pl.16,f.3) の中で鹿児島市外産を图示された。分布は本州、四国、九州、台湾となっている。

戦後の図鑑類にはほとんど図説されているが、本州における産地は限定されているように思われる。

1994年の水沼哲郎・永井信二による "世界のクワガタムシ大図鑑(むし社・東京)" での図説によると(pl.136,f.645,p.229), その分布は日本:本州(山口県, 紀伊半島沿岸部), 沼島(兵庫県), 四国(南部沿岸部), 沖の島(高知県), 九州, 白島(北九州市), 高島(佐賀県唐津市), 加部南(佐賀県東松浦郡), 伊豆諸島(神津島, 三宅島, 御蔵島, 八丈島), 対馬, 五島列島, 平戸島, 男女諸島, 天草諸島(下島), 屋久島, 口之永良部島, トカラ列島(口之島, 中之島, 悪石島), 奄美大島, 徳之島, 沖縄本島, 石垣島, 台湾となっている。

1966年の吉田賢治著 "日本産クワガタムシ大図鑑" (虫研・埼玉) によるとほぼ同じ分布地になっている。

兵庫県では沼島がよく知られているが、定着しているのかそれとも漂流物と一緒に来たものかよくわからない点がある。しかし、家島で森 正人氏が採集しておられるとのこと(楠井善久,LAMELLICORNIA



兵庫県におけるマメクワガタの分布

No.8,p.20,1992). こうなると瀬戸内の島々に分布している可能性も高い。

産地。

三原郡南淡町沼島[幸形,1986, 田中,1987, 水沼,永井,1994].

飾磨郡家島[楠井,1992].

#### Subfamily Lucaninae クワガタムシ科

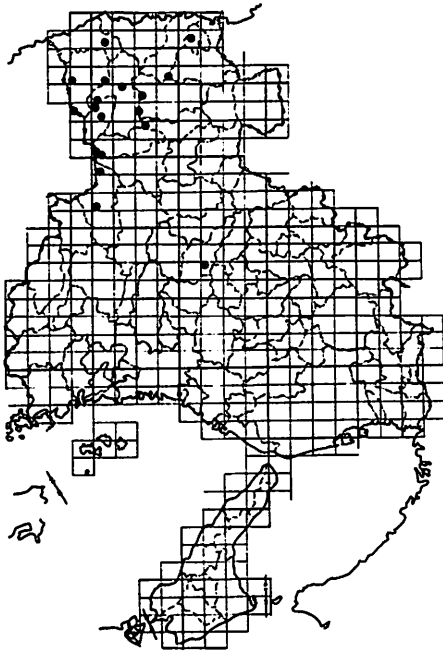
#### Genus *Platycerus* Geoffroy,1762

#### 6. *Platycerus acuticollis akitai* Fujita,1987

#### キンキコルリクワガタ

ルリクワガタと称されているものには明瞭に区別できる2種類が含まれているとして、1969年黒沢良彦博士によってコルリクワガタ *Platycerus acuticollis* Y.Kurosawa が分離された(Bull. Nat. Soc. Mus. Vol. 12,No.3,p.478-482,pl.1,f.1). ところが、このコルリクワガタが地理的変異に富んだ種であることから、1987年藤田 宏はこの種が4種に区別されることを発表した(月刊むしNo.197,p.3-7,1987).すなわち、コルリクワガタ(原名亜種)

subsp. *acuticollis* Y.Kurosawa, トウカイコルリクワガタ



兵庫県におけるキンキコルリクワガタの分布

subsp. *takakuwai* Fujita, キンキコルリクワガタ

subsp. *akitai* Fujita, ミナミコルリクワガタ subsp.

*namedai* Fujita である。

これにより近畿地方、兵庫県産はキンキコルリクワガタになるのではと考えられる。もっとも、原名亜種のコルリクワガタも兵庫県にいるのかも知れないという疑問はある。これについては兵庫県産コルリクワガタを全部検してみなければならない。実際にはそれは無理のようだし、今後の調査に待たねばならないとして、兵庫県産のものはキンキコルリクワガタとして扱っておくことにする。

県下の産地は今のところ但馬地方から知られているのみであるが、1例神崎郡での記録があり、まだ他の地域に分布している可能性がある。

産地。

神崎郡神崎町根宇野笠形山[佐藤,1993, 永幡,1992].

宍粟郡赤西[田中,1987], 波賀町氷ノ山殿下コース、

坂の谷林道、千種町駒ノ尾山[佐藤,永幡1994].

城崎郡城崎町来日岳[永幡,1992,1993], 香住町三川山[谷角,1988], 日高町蘇武岳,金山峠付近?

[佐藤,永幡,1994].  
養父郡氷ノ山[Kurosawa,1969, 高橋,1981,1982, 田中,1987, 谷角,1988], 八鹿町妙見山?, 関宮町氷ノ山大段ヶ平殿下コース[佐藤,永幡,1994].

美方郡扇ノ山[Kurosawa,1986, 辻,1972,辻,岸田,1972, 高橋,1981,1982, 但馬むしの会,1984, 谷角,1985,1988, 足立,谷角,1986, 足立,1986, 田中,1982,岡島,山口,1988], 浜坂町本谷,温泉町牛が峰山,美方町鍛冶屋?, 村岡町本谷奥,村岡町小城,村岡町和佐父?, 村岡町蘇武岳[佐藤,永幡,1994], 美方町小長岫[佐藤,1996], 温泉町槍尾(標高340m)[永幡,1997].

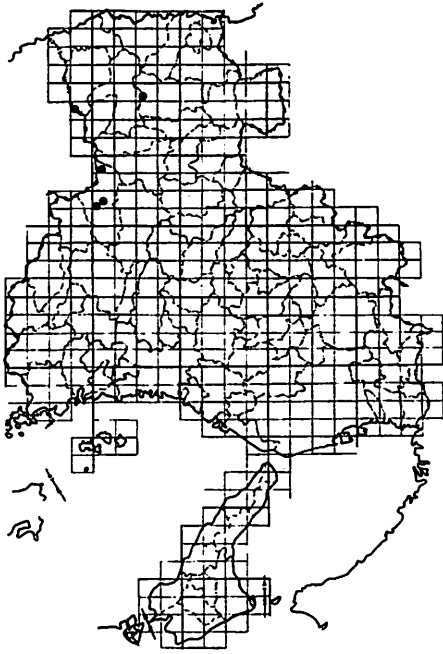
#### 7. *Platycerus delicatulus* Lewis,1883

#### ルリクワガタ

本種は Lewis により Oyayama, Odaigahara, Chuzenji にて6月,そして Ontake にて8月に得られた25♂,20♀♀の標本で命名記載された(Trans. ent. Soc. London,p.338,t.14,f.3,♂,1883). この標本の中には *Platycerus acuticollis* が含まれていて、森本博士によって大英博物館に保管されている標本が確かめられた経緯が詳しく説明されている(黒沢良彦,甲虫ニュースNo.7,p.3,1869).

本種の生活史については下山健作氏の報文がある(昆虫学評論,6巻2号,pp.10-12,pl.3,1952).

市川敏之は8月30日にルリクワガタ♀の蛹を得たという。さらに秋期朽木採集で若齢幼虫(同年の6月



兵庫県におけるルリクワガタの分布

頃に産卵された卵から孵化したものと、終齢幼虫、さらに成虫が得られたことから成虫になるまで2~3年を要すると考えられる興味深い記録をされている(月刊むしNo.122,1981)。

分布は日本特産種で北海道、本州、四国、九州である。本種の県下の産はかなり限られた地点において知られているだけであるが、詳しい調査をすればまだまだ産地があるのではないかと考えられる。

産地。

大栗郡音水 [Kurosawa,1965], 音水・赤西 [田中, 1987], 波賀町氷ノ山坂ノ谷林道 [佐藤,永幡, 1994]。

城崎郡日高町蘇武岳 [佐藤,永幡,1994, 佐藤,1996]。美方郡扇ノ山 [辻,1972, Y.Kurosawa,1969, 辻,岸田, 1972, 高橋,1981,1982]。

Genus *Lucanus* Scopoli,1763

8. *Lucanus maculifemoratus* Motschulsky,1861

ミヤマクワガタ

本種ははじめ Motschulsky によりインド原産の *L. cantori* として日本から記録された (Etud. Ent. p. 16,1860)。そしてその翌年 Motschulsky は *L. ma-*

*culifemoratus* なる新種を日本から記載した (Etud. Ent. X, p.9,1861)。さらに1866年, Motschulsky はこの両種とも日本に産するとしている (Bull.Soc. Nat. Mosc. p.39)。

Lewis は1883年, 次のようにこの両者について論じている。すなわち, Motschulsky の *maculifemoratus* と *cantori* は同一種であり, 日本に産するものは *maculifemoratus* として取扱わなければならないことになる。この両者の日本から記載に用いられた標本を実際にモスクー大学動物学博物館で検された中根猛彦博士は *maculifemoratus* のタイプは中型のみで大腿の基部歯は薄いが中央歯(第3歯)よりわずかに長い。 *cantori* のラベルのあるものは同一種の小さいみであると発表している (Bull. Natn. Sci. Tokyo 15(3):421,1972)。

Motschulsky の命名した1861年に Snellen van Vollenhoven が *L. sericans* なる種を日本から記載している (Tijdschr. V. Ent. IV,p.703)。

この記載種も *maculifemoratus* と同一種であり, このことは Vollenhoven 自身のように認めているようであるが (Tijdschr. V. Ent. IV, p.147,1865), このタイプ標本はオランダの Leyden 自然史博物館に保管されていて中根猛彦博士はそれを検し, 写真に撮影されたがやはりミヤマクワガタの小型のみであることがはっきりした(北九州の昆虫26巻,1号, pl.1, p.1,1979) (この標本はシーボルトの採集品である)。

Parry が1862年に東インド産の *L. hopei* なる種を記載した (Proc. Ent. Soc. Lond.,p.108,♂), そして1864年に同じ材料によって産地東インド及びマレー諸島を掲げた (Trans. ent. Soc. Lond.,p.9, t.4, f.2, 1964), 図はミヤマクワガタと同じものである。

Parry はその報告の中で *hopei* は *sericans* (De Hann M.S.) Voll. と同種(?)で, Miszech と彼の採集品としてライデン博物館に♀あり, 産地はジャワで S. van Vollenhoven により *sericanus* (1861) と書かれたのは誤りであり, 後者は多分 *L. maculifemoratus* の小型種であろうとしている。

三輪勇四郎博士はジャワとジャパンを当時の状況から混同していたのではないかといわれたが, 当然それは考えられることである(台湾博物学会々報21巻,p.319,1931)。その後 Parry は *hopei, sericans* とも *maculifemoratus* のシノニムであると報告している (Trans.ent. Soc. Lond.,p.53,1870), Heyden は本種をアムールより報告し, 北中国及び日本に産すると付記し, 同時に「*sericans, hopei* とともに同種なり」と報告している (Deutsch. Ent. Zeitscher.,p.276,1884)。

Planet は1898年 *maculifemoratus* の変種として



*elegans* を Leach が函館で採集した 1 頭(1898)と Ning-Poo(中国寧波?)で採集した 1 頭(ともに Fairmaire の採集品である)で記載(Naturaliste, p.19 & 253, f.2, 2♂3♀, 1896)した。他に「修道院長 A. Dawid より送付されたエゾ産の 2♂2♀(同一地方産)もあり」とある。三輪勇四郎博士は函館付近産だろうとされている(1931)。

現在の分類では大蹠の形態によって日本産のものは 3 つの型に分けられている。つまり, *f. hopei* Parry, *f. nakanei* Y.Kurosawa, *f. maculifemoratus* Motschulsky である。

*f. honei* は北海道, 本州の北部及び中央山岳地帯, 稀に九州の山地に産するといわれているが, 今のところ兵庫県下でこの型のものは知らない。後の 2 つの型はともに兵庫県に産する。

*f. maculifemoratus* の型が一番普通であるとのことであるが, 兵庫県産のものはむしろ *f. nakanei* の方が多いようである。もっとも, これは所有標本よりの比較で, 従来記録されているものがどちらの型に属するかは確かめようがないので, その点是不充分であるが大蹠の型での区別ではそれほどはっきりと分布が分かれないので, とくに分けて取り扱う必要はないように思われる(大阪地方に産するものはほとんどが *f. nakanei* であるらしい。日浦, 1978)。従って, 産地については型に関係なく記録しておく。

兵庫県では普通種であるが, 神戸市内あたりでは, ノコギリクワガタ, コクワガタの方が多く, 本種はそれらに比して少ない。本種の種名は“斑紋のある腿節をもった”という意味で, 腿節に横長の黄褐色紋を有する特徴を表している。

産地。

洲本市先山 [堀田, 1973, 1976]。

川辺郡猪名川町上阿古谷, 杉生 [仲田, 1978], 三草山 (2♂, 5.VII.1980), [水沼, 1991]。

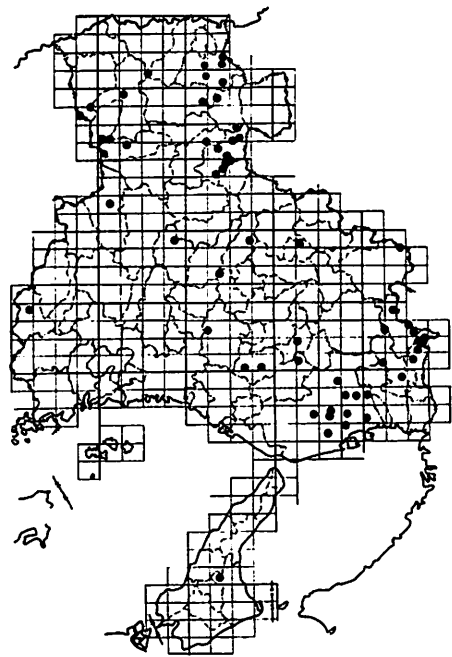
川西市一庫, 笹部, 花折橋付近, 横地, 西畦野, 芋生 [仲田, 1978, 1982], 笹部 (1♂, 21.VII.1956, Tsukaguchi leg.)。

宝塚市武田尾 (1♀, 25.VII.1954), 香合新田, 売布が丘 [田中, 1992]。

神戸市御影 [関, 1933], 六甲山 (1♂, 15.VII.1956), 摩耶山 (1♀, 21.VII.1955), 布引 (1♂, 20.VI.1952), 鳥原 (2♂, 28.VI.1939, etc.), 山の街 (2♂, 4.VII.1954), 北鈴蘭台大山公園 (1♂, 11.VII.1990), 大池 (1♂, 3.VIII.1940), 八多町屏風 (3♂2♀, 22.VII.1993, etc.), 藍那 (2♂, 5.VII.1959, etc.), 逢山峡 (1♂, 28.VII.1987)。

三木市口吉川 (1♀, 3.VII.1986)。

小野市来住町 (1♂, 21.VI.1971), 山田 (1♀, 17.IX.



兵庫県におけるミヤマクワガタの分布

1987)。

加東郡東条町森 (1♂, 22.VI.1984, etc.)。

加西市畑 (1♂, 23.VI.1974)。

多可郡市原 (1♂, 24.IX.1972), 笠形山 [西脇, 1965]。

神崎郡大河内町川上 (1♂, 5.VII.1977)。

佐用郡上月 (1♂, 27.VI.1960)。

宍粟郡音水 (1♂1♀, 20.VII.1969)。

水上郡 [山本, 1958]。

多紀郡雨石山 [Hayashi etc., 1995]。

出石郡出石町有子山, 三木, 桐野 [高橋, 1981]。

朝来郡和田山町比治, 牧田岡, 竹田, 林垣, 桑原, 和田, 柳原, 法興寺, 竹ノ内 [谷角, 1989], 山東町宇山 [谷角, 1988, 1994]。

豊岡市福田 [高橋, 1975], 柴町, 三開山, 大師山, 下陰, 妙楽寺, 河梨峠 [谷角, 1988]。

城崎郡三川山 [高橋, 1981], 日高町上ノ郷 [谷角, 1988]。

養父郡氷の山 (3♂2♀, 23.VII.1956), 養父町養父沢 [谷角, 1988, 1994], 関宮町鉢伏, 水ノ山, 葛畑 [谷角, 1988, 1994]。

美方郡扇ノ山 [辻, 1963, 辻, 岸田, 1972, 谷角, 1985, 1988], 美方町熱田 [谷角, 1985, 1988], 温泉町扇ノ山, 肥前畑 [谷角, 1988], 村岡町入江 [谷角, 1988, 1994]。